

下野市書道連盟講話会

郷土で育てる書文化 1

下野市に遺る名碑

亀田鵬齋書

黄梅寺第四世光雲和尚壽藏碑

令和四年五月一日(日) 一一〇〇〜一二〇〇

会場

下野市コミュニティー友愛館ホール

講師

大浦舟人

(栃木県書道連盟副会長)

黄梅寺（おうばいじ）跡

黄梅寺は江戸湯島靈雲寺（真言律宗）の末寺で、寛文年間（一六六一～七二）に本吉田を知行した旗本松前氏（松前泰広）の祈願寺として深玄律師が開基したと伝えられる。明治4年（一八七一）の「黄梅寺境内麓（そ）絵図」によると、境内には本堂、経蔵、供養塔、宝篋印塔、弁天が設けられていた。明治22年（一八八九）に吉田村が成立すると、境内に明治31年（一八九八）まで吉田村役場が置かれ、庁舎は本堂や不動堂とともに平成初期まで残っていたというが、現在は廃寺となっている。旧境内には亀田鵬齋書「黄梅寺第四世光雲和尚壽藏碑」と石造の宝篋印塔が往時を偲ばせている。宝篋印塔は高さ4.7mで、石造のものとしては比較的大型で市内最大のものである。蓮華の請花上部2段目の基礎四面には「享保二十星紀乙卯仲春鬼宿日」とあり、享保20年（一七三五）に造立されたことがわかる。

※宝篋印塔とは墓塔・供養塔などに使われる仏塔の一種で、「宝篋印陀羅尼」（呪文）を内に収めた供養塔をいう。



現在の黄梅寺跡地。荒寥とした空き地に放置された宝篋印塔、黄梅寺第四世光雲和尚壽藏碑、柘植の木が栄枯盛衰の感傷を誘う。



黄梅寺第四世光雲和尚壽藏碑

- 所在地 栃木県下野市本吉田七四六―九 黄梅寺廃寺跡（湯島の霊雲寺所管）
- 揮毫年月 文化十四年（一八一七年）七月 この時、光雲和尚は六十九歳
- 撰文及び書者 亀田鵬齋（一七五二―一八二六）揮毫時六十六歳
- 碑文 碑陽隸書十三字 碑陰碑側楷書六七六字
全文六八九字（碑座立碑教下弟子名は除く）
- 碑格 碑身 五三cm×五三cm×一三九cm
- 碑座一段 一〇三cm×一〇七cm×40cm
- 碑座二段 七八cm×八〇cm×四〇cm
- 石工 記載なし



光雲和尚（一七四九年〜卒年不詳）

黄梅寺第四世住主（住職）。下総国相馬郡中谷原村（現在の茨城県取手市中部）の出身で俗姓は酒井。名は光雲、字は見龍。初名は居中、号は谷神堂。父覺雲により十二歳の時に黄梅寺の光麟和尚の弟子となり、後に第四世として黄梅寺住主を継ぐ。



5



黄梅寺第四世光雲和尚壽藏碑

(一八一七年)

下野市本吉田)

黄梅寺第四世光雲和尚壽藏碑（二八一七年）の拓影（二面から）

和尚者道德精進常坐不卧持戒堅固之師也既承具足戒於靈雲第七世
靈麟大和尚而為下毛河内郡本吉田首梅寺第四世之住主焉和尚名光
雲字見龍初名居中又自彌谷神堂俗姓潘井氏下總相馬郡中谷原邑之
人父某自於啖素奉佛已過需其教持守不少懈鄉有海直沙彌者道價頗
高自持戒律不就寂者四十餘年遷化之日茶毗之後舍利數百顆實清淨
法身之所也又其徒之愛直者陀羅尼及普門品之秘自此之後觀色影於
梁世等死生於夢中而捨妄歸真也志愈堅矣即以同郡某子為嗣以女妻
之乃欲削頭披緇而適世妻子環泣留之其明夜竊出家而太時年三十六
遂入于萊州長樂寺就隆泉上人而受教焉陵後覺雲彌智淨繩床趺坐不
復下山後以壽而終先是投其子某于黄梅寺光麟和尚為其弟子即光雲

和尚是也時年十二歲岐嶷穎悟篤信佛曲在黄梅者二十年道德精進深造
佛諦普與同郡俊禪和尚相友善世推禪法為師字觀行者禪公後住于芳賀
郡淨蓮寺徒弟奉侍其側者衆皆謝遣之自運米搬柴以給薄粥杜門枯
坐者二十年老寢疾和尚適造庵訪之禪公執手而告曰老身死在旦夕
惟恨木山大悲閣及草庵日就圯頽和尚重修焉若賴和尚之靈以山門增輝
則老身永瞑于地下矣和尚遂領之乃十方化緣以踐禪公之遺囑焉於是
樋口谷田貝兩村里之及擅越羊競為除地聚財剝削起五金帛之施川匯
河輪堂塔經閣皆極極莊嚴累月工竣實竟政乙卯春三月也和尚乃登壇說
法講演妙義四方自茲而到者六百餘人今茲和尚年六十九雙瞳如電骨
格強健嘗擇地造壽藏以為安措之慶焉使余作之銘嗟呼其父淨公決然捨

妄述而超脫塵外和尚嗣之而其所以披南嶽幽邃慈秘櫃東漸弘通之經
大轉法輪使斯道而流通無礙於後代者實淨公肇基之力也而和尚開演
之功亦勉矣哉乃按其所聞記梗槩云

江戸 鵬齋龜田興模并書

銘文

第二面（北）碑側 一〇行 二九〇字

和尚者道德精進常坐不臥持戒堅固之師也既承具足戒於靈雲第七世靈麟大和尚而為下毛河內郡本吉田黃梅寺第四世之住主焉和尚名光雲字見龍初名居中又自號谷神堂俗姓酒井氏下總相馬郡中谷原邑之人父某自幼啖素奉佛已涵濡其教持守不懈鄉有海真沙彌者道價頗高自持戒律不就寢者四十餘年遷化之日茶毘之獲舍利數百顆實清淨法身之師也父某從之受真言陀羅尼及普門品之秘自此之後觀泡影於浮世等死生於夢幻而捨妄歸真之志愈堅矣即以同郡某子為嗣以女妻之乃欲削頭披緇而道世妻子環泣留之其明夜竊出家而去時年三十六遂入于常州長樂寺就隆泉上人而受教焉改名覺雲號智淨繩床趺坐不復下山後以壽而終先是投其子某于黃梅寺光麟和尚為其弟子即光雲

第三面（東）碑陰 一〇行 二九四字

和尚是也時年十二歲岐嶷穎悟篤信佛典在黃梅者二十年道德精進深造佛諦嘗與同郡俊禪和尚相友善世推禪公為阿字觀行者禪公後住于芳賀郡淨蓮寺徒弟奉侍其側者眾皆謝遣之自運水搬柴以給薄粥杜門枯坐者二十年老寢疾和尚適造庵訪之禪公執手而告曰老身死在旦夕惟恨本山大悲閣及草庵日就圯毀煩和尚重修焉若賴和尚之靈以山門增輝則老身永瞑于地下矣和尚遂頷之乃十方化緣以踐禪公之遺囑焉於是樋口谷田貝兩村里正及檀越等競為除地聚財剏削起工金帛之施川匯河輪堂塔經閣皆極莊嚴累月工竣實寬政乙卯春三月也和尚乃登壇說法講演妙義四方負笈而到者六百餘人今茲和尚年六十九雙瞳如電骨格強健嘗擇地造壽藏以為安措之處焉使余作之記嗟呼其父淨公決然捨

第四面（南）碑側 四行 九二字

妄迷而超脫塵外和尚之而其所以披南嶽幽邃之秘據東漸弘通之經大轉法輪使斯道而流通無礙於後代者實淨公肇基之力也而和尚開演之功亦勉矣哉乃掀其所聞記梗槩云

文化十四年丁丑秋七月

江戸 鵬齋龜田興撰并書

和尚、徳を道おこなうに精進し、常に坐して臥せず、持戒堅固の師なり。既に具足戒を靈雲第七世靈麟大和尚より承け、而るに下毛河内郡本吉田黄梅寺第四世の住主となる。和尚、名は光雲、字は見龍、初名は居中、また自ら谷神堂と号す。俗姓は酒井の氏、下総相馬郡中谷原村の人。

父某、幼より素を啖かみ仏を奉じて已に涵濡す。其の教え持守していささかも懈おこたらず。郷に海真沙彌しやみ有り。道價頗る高く、自ら戒律を持して就寝せざること四十餘年。遷化の日、荼毘これ舍利數百顆を獲る。實に清淨法身の師なり。父某、これにより真言陀羅尼及び普門品の秘を受く。此れより後、泡影を浮世に、死生を夢幻に觀、而して捨妄歸真の志、愈いよ堅し。即ち同郡の某子を以て嗣と為し、以て妻を女めとる。これ乃ち削頭披緇ひしにして世遁のがるを欲す。妻子、環泣して之を留むも其の明夜竊ひそかに出家して去る。時は年三十六、遂に常州長樂寺に入りて隆泉上人に就き教えを受く。名を覺雲、號を智淨と改め、繩床趺坐にして復び山を下りず、後以て壽のちながくして終えん。先ずは是れ其の子某を黄梅寺光麟和尚しやうりんに投じて其の弟子即ち光雲となす。

和尚是也時年十二歳岐嶷ぎぎにして穎悟、佛典に篤信す。黄梅に在ること二十年、徳を道おこなふに精進し、佛諦ぶつたいを深造す。

嘗て同郡の俊禪和尚と相友となす。善世推禪なる公は阿字觀の行者となり後に芳賀郡淨蓮寺に住す。其れ側に奉侍する徒弟は衆皆この遣を謝し自ら水運び柴を搬びて以て薄粥を給ふ。杜門枯坐すること二十年。年老ひ寢疾なる。和尚、適たま庵を造るに之を訪ねしに、禪公手を執り告して曰く老身死は旦夕たんせきに在り、惟おもふに本山の大悲閣及び草庵、日に圯毀いに就るを恨む。和尚、重修せんことを煩む。若し和尚の靈に頼らば以て山門増輝にして、則すなわち老身地下に永瞑えいめいせんと。和尚遂に乃すなわち十方の化縁を領がんじ、以て禪公の遺囑を踐おこなう。於是こゝ樋口、谷田貝両村里は正ただしく及に檀越だんおつ等競いて除地となし財を聚めて削起工するに、金帛の施は川匯あつまりて河となすごとく堂塔經閣を輸くすは皆、莊嚴を極む。月を累ね工の竣なるは、實に寛政乙卯（一七九五）の春三月なり。和尚乃るに登壇して妙義を説法講演すること四方に負笈、而るに到る者六百餘人。

今茲こゝに和尚年六十九にして雙瞳は電いなずまの如く、骨格は強健なり。嘗て地を擇えらび壽藏じゆざうを造す。以おもて爲なるここに安んじ措く。余をして之を作さしむ。嗟呼ああ其の父淨公決けつ然ぜんとして妄迷まよを捨て塵外ちんがいに超脱ちやうたつす。和尚これ而るに其所以そのゆゑ以南嶽幽邃いんがくゆうすいの秘を披ひかんと東漸とうぜん弘通くわうつうの經を據たぶ。大轉法輪、斯道しだうをして、後代ごだいに流通りゆうつう無礙むがいせしむは實まことに淨公じやうこうの肇ちやう基きの力にして和尚の開演かいえんの功亦た勉たなり。乃すなわち其の聞きく所ところを掀かげ授こう契がいを記す。

文化十四年丁丑秋七月

江戸 鵬齋龜田興撰並びに書

「語彙解説」

持戒 仏教徒たるべき戒律を保つこと。

陀羅尼 能(よ)く総(すべ)ての物事を攝取して保持し、忘失させない念慧(ねんえ)の力をいう。

披緇(ひし) 黒染めの仏衣をまとう

恩恵が及ぶこと

跏趺坐(ふせ) 「跏」は足の表の意。足を組み合わせてすわること。また、仏教の坐法の一つである結跏 跏坐(けっかふざ)のこと。

沙彌(しゃみ) 具足戒を授けられていない見習い僧

僧としての評判

道價(みちやま) 生まれつき、しつかりしていて立派なさま。

岐嶷(きぎ) すぐれた理解力があり、一際賢いこと。

穎悟(えいご) 信仰心があついこと。

篤信(とくしん) 悟り

佛諦(ぶつたい) 深く研究する。造詣を深める

深造(しんぞう) 真言密教の瞑想法の一つ、瞑想により「世界と自分はひとつである」ことを実感すること

阿字觀(あじくわん) 杜門枯坐 杜門は門を閉ざし外界との接触を断つこと。枯坐はもの寂しく一人ですわっていること。

旦夕(たんじつ) 時期が、この朝か晩かというように迫っていること。

大悲閣(だいひかく) 觀世音菩薩像を安置した仏堂。觀音堂。

倒塌毀壞。

圯毀(いげい) 承諾すること

領之(りやうし) あらゆる方向

十方(じゅうぽう) 仏が衆生を教化する因縁。人々を仏道に教え導くきっかけ。

檀家

除地(ぞち) 清められた地

雙瞳(そうどう) 一つの眼球に二つの瞳孔があること。「貴人の相」、「金骨の相」とされる。

壽藏(じうざう) 生前に自分で作る墓

負笈(ふげき) 笈を負って遠くへ行く意。遠くへ布教に出かけること。

幽邃(ゆうすい) けしきなどが奥深くて物静かなこと。

東漸(とうせん) 勢力が東の方へ次第に伝わり広まること。「仏教が―する」

弘通(くわうつう) 仏法がひろまること。

轉法輪(てんぽんりん) 教え(法)の輪を転ずることの意で、ブツダ(仏)の説法をさす。

無礙(むがい) とどこおらせる障害がないこと。邪魔するものがないさま。

鞏基(こうき) 基礎をつくること

梗槩(けいがい) あらまし

亀田鵬齋（かめだぼうさい 一七五二年～一八二六年）

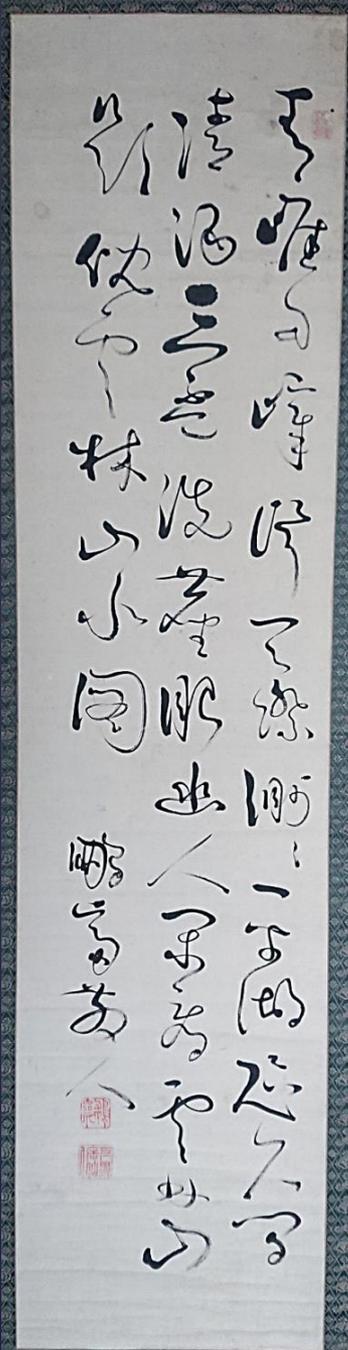
徳川中期の儒者。寶曆二年十月四日（九月十五日とも）江戸神田に生まれる。名は長興（略して興という）、字は釋龍、初めは名は翼、字は圖南という。鵬齋または善身堂と號した。幼名は彌吉、後に文左衛門と稱した。長じて井上金峨に学び、二十餘歳にして業を市中に開き、赤坂日枝神社の側、駿河臺、本所出村、根岸などに居を轉じ、文化の初めより下谷金杉に住し、文政九年三月九日、同所に歿した。年七十五。遺骸は淺草今戸正福寺に葬る。人となり豪宕不羈にして、學は百家を博綜して、識見甚だ高かった。鵬齋の儒学の師は井上金峨だが、書の師匠は三井親和といわれる。

「亀田三先生傳實私記」



亀田鵬齋「題倪雲林山水図」

雲林山水図をみて題す ※倪は睨に通ず



〔観星楼所蔵〕

青唯好嶂聳天際 渺々平湖咫尺間。

清酒三盃洗塵眼 幽人閑看雲林山。

青なるはこれ嶂聳の天際を好しとす。

渺々たる平湖、咫尺の間。

清酒三盃すれば塵眼を洗い、

幽人は閑かにして雲林山を看る。

嶂聳…高く険しくそびえる山

渺々…広い水（湖面）

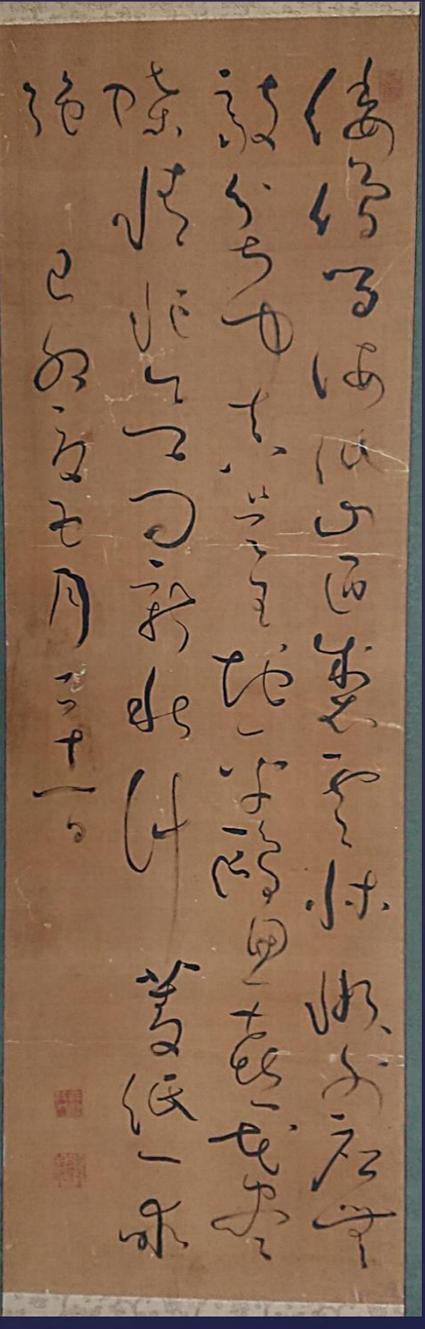
平湖…浙江省嘉興市に平湖市

咫尺…しせき、わずかな距離

空と湖面との距離をさす

幽人…世を避けた人

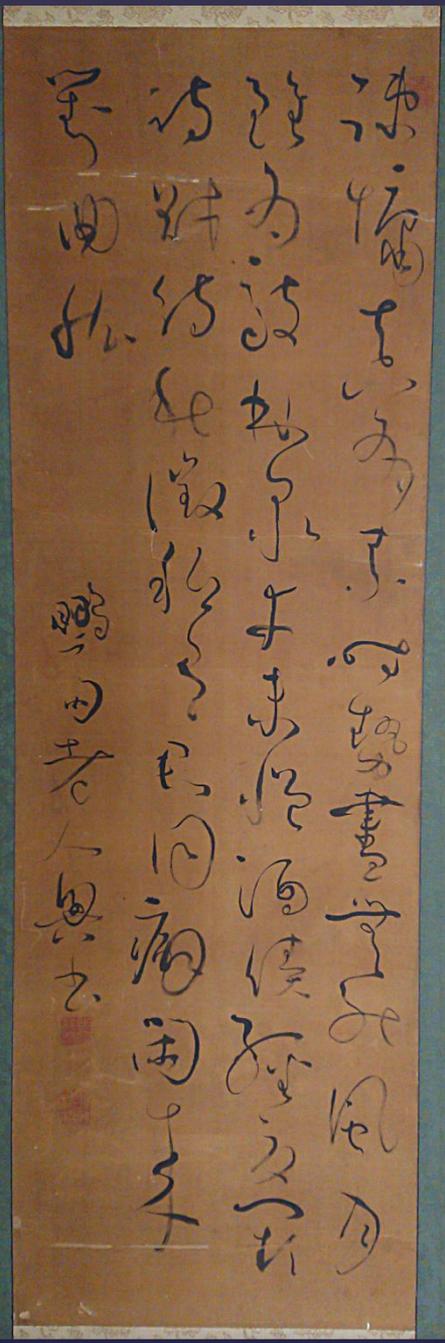
「陸龜蒙詩『襲美見題郊居十首、因次韻酬之以伸榮謝』 3



倭僧留海紙 山匠制雲床。 懶外應無敵 貧中直是王。

池平鷗思喜 花盡蝶情忙。 欲問新秋計、菱絲一畝強。

「陸龜蒙詩『襲美見題郊居十首、因次韻酬之以伸榮謝』 10



疏慵真有素 時勢盡無能。 風月雖為敵 林泉幸未憎。

酒材經夏闕 詩債待秋征。 只有君同癖 閒來對曲肱。

陸龜蒙（りくきもう、～八八一年）は、**中国・唐**の詩人。**字**は魯望。
皮日休（ひじつきゅう、八三〇年代～八八三年）は、**中国・唐**の詩人・

革命的社会派の学者。字は襲美。友人に、同年代の詩人である
陸龜蒙がおり、二人を合わせて皮陸と呼ぶことがある。